

書籍、出版、印刷、 活字、書体について の考察。

松澤 洋

本という巨大文明を知る、
その導き手に感謝

…松澤 洋さんのご紹介

かわいファームの川合君のお父様である松澤洋さんから、『続倭詩』の感想書評を頂き、そのお礼を述べた所、あまりにも書籍・印刷のことについて詳しいのでお尋ねしました。何と、あの「大日本印刷」の北海道支社長であったことにも、二重の驚きをもちました。ある大学でその講義もなさっておられたとか。すでに、24、5 回分の内容で、微に至り細を穿つほど、本というものの全体像をくまなく網羅されておられる。その内容たるや、「書籍や印刷、書体」、「知識伝達に必要な情報システムにおける記号としての文字」「記号としての文字を生かした印刷の関係」「記号として表すには余りにも膨大な量の象形文字を基とした文字を使った文明との差によるシステム化の進展具合」などなど、テーマが多岐にわたり、印刷の歴史が鳥瞰できるのです。その講義録をそのままにして反故になるのを見るに忍びず、今回その一回目をまとめて頂いたもの。このまま掲載続けるのは、まほろばの分を過ぎるものになる為、そのさわりに留めたが、実に惜しい気がしてならない。実は、松澤さんは、病床の身において文章に彫琢を加えられたことなど、無理を通されたこと、誠に申し訳ない限りであります。これを継続して行くには今の所、困難であり、その回復を待つて、その続編の発表を待ちたいと思います。



ともあれ、氏の快癒を祈り、感謝のお礼と共に、この第一回の論考が皆様の目に触れることの歓びを分かち合いたいと思います。ありがとうございました。

まほろば主人 宮下 周平

書籍、出版、印刷、活字、 書体についての考察。

文字は、どうして生まれたのだろう。各地の民族に言葉が生まれ、権力者である王の歴史や法律を記録するために、様々な文字が生まれました。記録する素材としては石を用いて、鋭い道具で刻むことが長く続きました。また、自分たちの民族の業績を誇るため、文字を書き記しています。話し言葉を記号化して残すためでした。この時代には、書籍とか本とかではなく、神殿の壁、石碑、等の石材が使われており、後に保存することを目的として木片、樹皮、粘土板などが使われるようになりました。

《活版印刷術の出現以前の書籍造り》

しかし、エジプトでは BC3,000 年頃のミイラとともに、死の国へのガイドブックとしてパピルスに書かれた「死者の書」が見つかっています。とはいえ、一般的に持ち運びができる素材としてのパピルスに文字を書くことは、さら次の段階でした。



●パピルスは、ギリシャ語では biblos で、本は bibliom、ラテン語では liber であり、まさに本の語源はギリシャ語のパピルスからきています。

●パピルスは、ナイル川に生えている水草の茎を平らに伸ばして加工して作成されるもので、現在の我々が使っている紙のように、折りたたむことができず、長く繋いで、巻物として使われていました。長い物は、10m 程もありました。

●紙は、BC2 世紀頃に、中国で発明され、初め廃止に書かれた碑文を移す拓本のように文字を写し取るために使われていました。紙がヨーロッパに伝わったのは 13~14 世紀頃、中国からオスマン・トルコなどイスラム教国のヨーロッパ侵攻によって、とされています。

●また、パピルスの良質な物はナイル川流域に限られていたため、エジプトに敵対していたペルガモン（現在のトルコ地方）の人たちが、高いパピルスを買わされていたので、代わりに動物の皮、特に羊、山羊の皮を鞣して紙の代わりに使用するようになりました。最上の羊皮紙（パーチメント、parchment）は、子牛の皮を鞣したものとされています。

●紀元前後には、パピルスは巻物として使うことができるが裏表には書けない、という欠点と、エジプトに対抗するという政治的な理由とから、さらに羊皮紙はパピルスに比べて軽く、丈夫で、



両面から書けることが出来たので、貴重な物であったが広く使われるようになりました。

●新約聖書テモテへの手紙第 2、4 章 13 節にパウロからテモテへの依頼として「あなたが来るときは、トロアス（トロイの木馬で有名なトルコのビガ半島にある）でカルポのところに残しておいた上着を持って来て下さい。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来て下さい。」とあります。この時（AD60～63 年頃）パウロは、ローマの獄中からエペソ（エーゲ海沿岸の今のトルコの街）にいる弟子のテモテに、冬を越すために上着と大切な羊皮紙の書物を持つてくるように依頼しています。この手紙にもあるように、羊皮紙の書物は大切な物でした。この頃には既にキリスト教福音布教のためにも、大きな力となりました。

《本を売る = 出版》

古代エジプトの巻物には、書記の姿が良く描かれています。筆写が奴隷の仕事であったアテネやローマでは、筆写している奴隷の姿を描いたものは残っていません。しかし、本の売買について書かれた文章は残っています。このことから、古代においても出版業が有り得たのではないかと考えさせられます。

●ここで、本の形態についてみてみましょう。ラテン語の本 = liber は、元々は樹木の内皮を表す言葉でした。これは、人間が古くから文字を書き記す素材が、樹木の内皮が石であったからです。他に、獣皮、木板、布、骨など様々な素材も使っていました。また、古代からパピルスはエジプトで作られ、ギリシャ、ローマ文明、文化の発展とともに、文字を書き記す素材として活用されてきましたが、AD2～4 頃には、羊皮紙にその座を譲っていきました。前にも述べましたが、エジプトに対抗する各地で、パピルスの代わりに獣皮が用いられていて、正確には分かりませんが、BC2 世紀以前から羊皮紙の生産が行われていた、と考えられています。書物の素材としてのパピルスと羊皮紙は、羊皮紙が出現した後の数百年間は併用されていたようです。その様子は、5 世紀のイタリア・ラヴェンナ地区の世界遺産教会群の中のモザイク画に残されています。このラヴェンナ教会群の中のサン・ヴィターレ聖堂は 395 年にイタリア・ボローニアで始まり、5 世紀にラヴェン

ナに移され、現存する壮麗豪華な内陣には美しいモザイク画が残され、入り口の中央頂部にキリスト、その左右に 12 使徒が描かれています。内陣の北・南には 2 階のギャラリーに岩場に座るマタイ、マルコ、ヨハネ、ルカが描かれ、その下には預言者モーセ・エレミヤ、モーセとイザヤが配置されていて、半円形の部分には旧約聖書のアブラハムとイサク、アブラハムの饗宴、アベルが捧げる子羊とサレムの王であるメルキゼデクが捧げるパンが書かれています。このモザイク画の中に、羊皮紙の書物とパピルスの巻物が書かれているのが分かります。



● 現在の本の形態である「冊子」の出現は、書物・書籍にとって革命的な出来事でした。この冊子体の書物は古代ローマで発明され、キリスト教の発展に伴い各地で普及していきました。それまでの書物は「巻物」でした。素材であるパピルスは折り畳み難く、裏表両面に文字を書くことができず、棒に巻き付ける巻物として流通・保存されていました。中には 10m にもなる書物(巻物)もあったと記録があります。この巻物を読むには、必ずと言っていいほど両手を使います。また、巻物は冊子に比べてかさばりました。



素材に羊皮紙が出てきたので、丈夫で両面に掛け、折り畳めるので持ち運びや読書も便利になりました。さらに何枚も重ね合わせて閉じる冊子体(コデックス=codex)が出現しました。

● 冊子体書物の出現により、今日まである本造りの様式が確立していきました。さらに、タイトル、目次、章分け、単語と単語の分離などが次第に形造られていきました。また、巻物に比べると羊皮紙の冊子は丈夫で扱い易く、テキスト(本の内容)の保存に適していました。巻物から冊子への変化の恩恵を受けなかったテキスト(本の内容)は、ほとんど消滅していきました。

● 冊子一冊で、数巻分の巻物の内容を収録できるため、複数の作品やテキスト(内容)について「初め」と「終わり」を明示して、書物の内部を「構造化」する必要が生じました。この構造化は、タ

イトル・目次・章分けなどを用いて行いました。冊子体の書物は、初見台に乗せて読むことで、片手が自由に使えるようになり、白紙



の頁や中世の本特有の広い余白にメモや注釈を書き込むことができるようになりました。

● 羊皮紙 Parchment パーチメントの語源は、ペルガモン王国の皮を意味するギリシャ語「ペルガメーネー」です。イタリア語ではペルガメーナ Pergamena です。製法は非常に手間がかかる作業でした。だから高かったのです。

1. 動物の皮を石灰水に浸し、毛を取る。
2. 木枠に張って、不純物を取り除き、乾燥させる。
3. 長方形の方に切り揃える。



羊皮紙(各種の獣の皮を使ったものも含めて)の製造方法は神の出現まで、殆ど進歩せず、平均的な本には約 15 頭の皮が必要であり、大変高価でした。このため不要になった羊皮紙は書かれた文字を削り落として再利用する「二重写本=パリンプセスト。Palimpsestes が多く存在しており、2005 年 2 月に発表された凸版印刷とヴァチカン教皇庁図書館との新しいデジタル解析の共同研究により、3 年間の研究で解析された文字や画像の解読とデジタルデータのアーカイブ化が研究、出版されました。

● 有名なマルチタレントの荒俣宏氏によれば、古代ギリシャのアリストテレスは、本を文字を記録する媒体=メディアとしてよりも、「内容を他の人に伝える」媒体=メディアとして理解し、活用した人だ、と讃えています。アリストテレスは、系統だって本を書き、他の人の書いた本もコピーして活用し、書いた本を自由に利用させました。それに反して、ピュタゴラスは本を書いたり読んだりすることを嫌っていて、ソクラテスやプラトンはあくまでも対話(肉声)を文字に置き換えたに過ぎないものと考えていました。しかし、アリストテレス(BC384~322.3月7日、古代ギリシャの哲学者・科学者)は、明らかに意思をもって書物を書いた人でした。



このアリストテレスは、マケドニアのアレク

サンドロス大王 (BC323 没、10 年で世界帝国を築き上げた) の家庭教師でした。弟子の一人のデメトリオスは、アレクサンドロス大王の東方遠征軍の将軍の一人でエジプトにプトレマイオス王朝を開いたプトレマイオス 1 世の相談役となり、王がアレクサンドリアに大図書館を作った時に、師のアリストテレスの書物を蔵書としています。

※プトレマイオス王朝最後の王がクレオパトラ 7 世で、エジプトが滅び古代ローマの属州となりました。プトレマイオス 1 世は BC305 ~ 285 年、秦の始皇帝は BC259 ~ 210 年、始皇帝の初の中国統一は BC221 です。

● プトレマイオス 1 世 (BC367 ~ 283) は、時のイスラエルの大祭司エルアザルから 72 人 (70 人とも言われている) の翻訳者を招いて、ヘブル語で書かれた旧約聖書をギリシャ語に翻訳し、アレクサンドリアの大図書館の主室に収めた、と伝えられています。また、この翻訳者たち 72 人は、



全員が別々に翻訳をしたにもかかわらず、訳されたギリシャ語は一言も違わずに合っていたので、正しく訳されていて今でも権威がある、とされています。この翻訳が行われた BC300 年頃の日本は、弥生式土器の時代です。

この後 (紀元後) にキリスト教が広く信仰されるようになるとともに聖書や使途や各地の長老、教父たちが書いた教えや手紙などが多く出現し、さらにそれらは写筆されて広められていきました。キリストの使徒であったパウロの同労者であるルカが AD61 年頃に書いたと言われている新約聖書使徒の働き 19 章 19 節には、「魔術を行っていた多くの者が、その書物を抱えてきて、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。」と記載があります。このことから、紀元前から筆写によりますが、出版 = 本を作り売ることが行われていたことが分かります。

5 世紀末に西ローマ帝国が崩壊した後、古代ギリシャの文化遺産はビザンティン帝国 (東ローマ帝国) に受け継がれ、書物は巻物から冊子体へ形態も変化していきました。さらに、古代ギリシャ、ローマ時代の精神生活を継承したのはキリスト教の修道院でした。例えば、529 年に中部イタリア・モンテカシーノにベネディクトゥス (AD480~547) が作ったベネディクト派修道院で

は、神への奉仕として教会文書の書き写しが奨励され、立派な筆写工房が作られ、キリスト教に関する聖書、典礼所、聖者伝、教父の著作等がせっせと筆写されていました。

その後、人々の思想を抹殺しようとする動きが起こり、65 年にはブレイトマイオス 1 世が設立し、さまざまな変遷を経ながらも存続したアレキサンドリアの大図書館が、サラセン軍によって破壊され蔵書の全てを公衆浴場の湯を沸かすために 6 か月に亘って燃やし尽くされたこともありました。

また、8 ~ 9 世紀には、イコン (聖画像) を礼拝することや、偶像礼拝を禁止するために、多くの書物が焼かれました。しかし、5 世紀末頃からケルトやアイルランドの修道士がヨーロッパ各地に修道院を設立し、キリスト教関連やギリシャ・ローマ時代の古典作家の作品が筆写され、製本されて修道院や聖堂内の図書館に保存されました。このことが中世ヨーロッパの知識と教養、伝統が保持、継承されていく機関となりました。これは、フランク王国 (AD5 ~ 9 世紀、フランス・ドイツ西部・イタリア北部を領土としたキリスト教的ゲルマン国家) の英雄であるカール大帝 (742 ~ 814 年) により、各地の修道院に図書館の設立と筆写を奨励したことが大きな力となっています。

今日知られている古代ギリシャのプラトンの最古の写本は、本人の死後 1,200 年以上経った 9 世紀にコンスタンティノーブル (現在のトルコ・イスタンブール) で筆写されたものです。つまり、最初の著作から 1,200 年も筆写され続けられてきたものです。



このように、出版と言っても、デジタルで処理してデータとして売る状態や、これまでのように紙に印刷し、製本して販売するシステムから見ると、大変な時間と労力を使って羊皮紙に筆写して冊子体として製本をする方法でしたが、出版という本を作り、知識を売るシステムは、古くから行われていたことが分かります。文字とは知識を配布する記号であるのですが、その認識はありながら、記号の形 (すなわち書体) を呼分味する段階には至っていませんでした。

今回は、12 世紀以降を話題として、これ等の推移を見ていきたいと思います。